

朝鮮語史研究

伊藤智ゆき編

아라幻환色식아닌전차라세흔서르짓느브

真眞空空이리반드
真眞空空아닌전

은이實실흔色식

알후미오부타는
생은와과聖의모
實의賓이라賓의
懸隔하샤제가物
人爲하샤제가物
이거나시體는非
크나나기體는非
處傳心者이爲禪

라자太대엇더하노소
지者자箇개無무字
바鼻비호有유些些巴
호직이無무字不
후者者一謂위호是
子不미開개差차別別
是시라하好호與여드

維랑니닝經경印인
다가이佛佛頂頂心
리라또善善男男予
상네조차노로되
蓮蓮花花황애았거
세西僧方方極극樂
은구피락필스시곤
익年년命명終중흔

이러하시니라
觀관音음스苦
度度脫탈하샤
이이에結결하
망그치샤물바
바사리고悲빙는

目次

유형론 및 언어접촉의 관점에서 본 한국어와 일본어 —일본어 화자 대상 한국어교육의 입장에서— 伊藤 英人	… 1
朝鮮語の方位を表す名詞 가로「横」세로「縦」に関する通時的考察 門脇 誠一	… 27
月印釈譜卷七の割注の底本について 趙 義成	… 39
韓国語の音韻史における混記について —朝鮮資料の分析を通して— 陳 南澤	… 53
現代 韓國語 否定文 使用의 推移에 대하여 —20世紀 小說資料를 中心으로— 南 潤珍	… 63
中国黒龍江省尚志市で話される朝鮮語のアクセント資料 —名詞編 李文淑	… 81
延辺朝鮮語漢字語アクセント資料 伊藤 智ゆき	… 103
資料翻字 早稲田大学服部文庫所蔵「朝鮮語訳」対話篇 岸田 文隆	… 161
『御牒』の朝鮮語 KWIC 索引 —本文・正順・逆順— 村田 寛	… 201

Table of Contents

Korean and Japanese from the Point of View of Typology, Language Contact, and Korean Language Education in Japan Hideto Ito	... 1
Diachronic Consideration of the Nouns 가로 “yoko” and 세로 “tate” Indicating Direction in the Korean Language Seiichi Kadowaki	... 27
The Original Text of the Inserted Notes of <i>Welinsekpo</i> Vol. 7 Eui-sung Cho	... 39
Variance in the Korean Spelling System in Early Modern Korean and the Transcription of Korean Source-Materials Namtaek Jin	... 53
Some Aspects of Negation in Current Korean -Focusing on Negation Frequencies in Fiction Texts of the 20th Century- Yunjin Nam	... 63
Accentual Material from the Korean Spoken in China Munsuk Lee	... 81
Accentual Data of Sino-Korean Words in Yanbian Dialect Chiyuki Ito	... 103
A Transliterated Text of the Chapter of Conversation of 朝鮮語訳 <i>Tyoosengoyaku</i> (Korean Translations, 1750), a manuscript stored in the Hattori Collection, Waseda University Library Fumitaka Kishida	... 161
A KWIC Concordance to the Korean in “EoCheop” Hiroshi Murata	... 201

月印釈譜巻七の割注の底本について

The Original Text of the Inserted Notes of *Welinsekpo* Vol. 7

趙 義成
Eui-sung CHO
東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

ABSTRACT. Although a large number of studies have been made on the original texts of *Welinsekpo*, little is known about the inserted notes of *Welinsekpo*. As a result of researching *Welinsekpo* vol. 7, many original texts of the inserted notes were identified. The aim of this paper is to report the original texts and to consider about the inserted notes.

キーワード: 月印釈譜, 釈譜詳節, 割注, 底本, 翻訳名義集

Keywords: *Welinsekpo*, *Sekposangcel*, inserted notes, original text, *fanyimingyiji*

1. はじめに

1.1 研究目的

月印釈譜本文の底本については過去に多く論じられてきたが、割注部分に関してはこれまで十分な検討が加えられてこなかった。このたび、月印釈譜巻七について、本文および割注を精査した結果、割注に関して少なからぬ部分の底本が判明した。本稿はそれを報告するとともに、併せて若干の検討を行なうのが目的である。

1.2 研究対象

本稿では割注を扱うが、15世紀の文献に関する多くの研究があるにもかかわらず、割注に特化した研究は極めて少ない。その中で박금자(1997)は15世紀文献の割注について包括的かつ詳細に検討した数少ない研究である。ここでは、割注を長さと言語の観点から「短型」と「長型」の2種に分け（「長型」はさらに「義理的長型割注」と「説話的長型割注」の2種に下位分類している）、それぞれ以下のような特徴を持つとしている（박금자 1997:143）¹。

短型割注：主に被解釈語の文字的・辞典的意味解釈だけから成っている文の集合体

長型割注

- (a) 義理的長型割注：主に被解釈語に関連して仏教の教理や背景を説明する文と、仏教の教義内において被解釈語が持つ意味を根幹として解説した字義解釈文の集合体

¹ 박금자의定義を見ると、「短型」、「長型」という名称を用いてはいるものの、それは長さによる区分ではなく、内容面からの区分であると言える。字義・語義の注は長さが比較的短いものが多く、義理的・説話的な注は長さが比較的長いものが多いため、このような名称を附したものと推測される。だが、内容面の区分であるならば、「長・短」という名称を与えるのは本来ならば適切ではないであろう。しかしながら、本稿では割注自体の考察ではないので、これについての議論は深めず、박금자의用語をとりあえずそのまま用いることにする。

(b) 説話的長型割注：説話的な話が含まれた文の集合体

前者の「短型割注」は「剃師는 머리 깎는 사람이라」（「剃師」は人の頭を刈る人である）〈月釈 7:8b2〉などがそれである。1 文だけから成る注も少なくなく、「文の数は多くても 3～4 個」(박금자 1997:143) である。しかしながら、このように字義を単純に解説した注は本稿の検討対象ではない。本稿の検討対象となるのは上記の「長型割注」、すなわち仏教の教理に関連した語句解説や仏教にまつわる説話などを収めた、長さの比較的長い注である。具体的には、後述の 3 章において言及する 7 箇所割注が本稿にて扱うものである。

2. 月印釈譜について

月印釈譜の編纂経緯については千恵鳳(1977)などすでに詳しい論考があるので、本稿では詳細に立ち入らない。周知の通り、月印釈譜は釈譜詳細と月印千江之曲を合わせたものである。釈譜詳細は世宗の命を受けて首陽大君（後の世祖）が、1446 年に死去した世宗の正室である昭憲王后の冥福を祈るために編纂した釈迦一代記であり、月印千江之曲は献上された釈譜詳細を見た世宗が自ら釈迦の功德を称えて編んだ頌歌集である。2 つを合本とする際に、釈譜詳細の章の構成に若干の変更が加えられている。

月印釈譜序によれば、釈譜詳細は僧祐の釈迦譜と道宣の釈迦氏譜を合わせたものとあるが、実際にはそれ以外の数々の經典を底本としている。千恵鳳(1977:479)によれば、世宗実録 28（1446）年 12 月の条に「命副司直金守溫 増修釋迦譜」の記述があり、これが「釈迦譜・釈迦氏譜はもちろん、諸伝経をあまねく涉獵し増撰」し、釈譜詳細の底本となった新たな「増修釈迦譜」であろうという。だが、残念ながらこの「増修釈迦譜」は現存せず、その姿をうかがい知ることはできない。

月印釈譜卷七の底本については、閔泳珪(1957)においてつとに明らかにされて以降、千恵鳳(1977)、沈載完・李鉉奎(1991)、李丙疇(1997)、강순애(2001)などで度々言及がなされてきた。これを再度整理すると以下の通りである。

張 数	底 本
(ws 1a3～1b2) ² ws 1b3～5b6	(月印千江之曲 其177) 四分律 卷第四 T22n1428p590b13～591c15 ³
(ws 5b7～7b1) ws 7b2～19a3	(月印千江之曲 其178～181) 雜寶藏經 卷第八 T4n203p485c12～486c25
(ws19a4～27a7) ws27b1～55b4	(月印千江之曲 其182～199) 仏説観仏三昧海經 卷第七 T15n643p679b07～681b04
(ws55a5～61b3) ws61b4～77b7	(月印千江之曲 其200～211) 仏説阿弥陀經 T12n366p346b28～348a26

² 月印釈譜の出典は ws を冠し、張次、裏表 (a, b)、行数の順で表示する。

³ 底本の出典は大正新脩大藏經および新纂大日本續藏經による。T を冠したものが大正新脩大藏經、X を冠したものが新纂大日本續藏經である「T22n1428p590b13」は大正新脩大藏經第22卷、經典番号1428番、590ページ、中段 (a:上段, b:中段, c:下段)、13行目を示す。これらの出典情報は、言語の文脈から經典が特定できる場合に限り、巻数 (上の例では「T22」) と經典番号 (同「n1428」) を省略し、ページと段 (同「p590b13」) のみを示す場合もある。

3. 月印釈譜卷七の長型割注とその底本

本稿では、月印釈譜卷七の割注のうち、以下(1)～(7)に見る 7 箇所割注について底本の検討を行なう。これらの割注は字義や語義を単純に解釈する「短型割注」ではなく、仏教用語を教理的に解説したり、仏教説話を記述した「長型割注」である。

(1) 「열두頭陀」への割注 (ws31a6-31b)

この割注の全文は以下の通りである。初めに「頭陀」の語についての大義が示され、続いて十二頭陀行の個々の項目が示されている。

頭陀는 떠러 버리다 혼 뜨디니 煩惱를 떠러 버릴 씨라. 열 두 횡더근 阿蘭若에 이슴과 상네 빌머굼과 누비 옷 니븀과 흐르 혼번 밥 머굼과 바블 머굼 대로 헤어 머굼과 낫 게어든 물 아니 머굼과 寂靜 혼 무덤 씨리에 이슴과 나모 아래 이슴과 한 덕에 이슴과 상네 눕디 아니 흙과 가스며니 艱難 혼니 굴히디 아니 혼야 次第로 빌머굼과 세 가짓 옷 쯔 가져 혼놈괘라. 세 가짓 오스 세 가짓 袈裟 | 니 大衣는 九條 十一條 十三條 十五條 十七條 十九條 二十一條 二十三條 二十五條 | 오 中衣는 七條 | 오 下衣는 五條 | 라 (頭陀は払い捨てるといった意である。煩惱を払い捨てることである。十二の行ないとは、阿蘭若に在ること、常に乞食すること、衲衣を着ること、一日に一度飯を食うこと、飯を食うのに数えて食うこと、昼を過ぎたら水を飲まないこと、静寂な墓の間に在ること、木の下に在ること、大きな所に在ること、常に横たわらないこと、金持ちと貧乏人を隔てずに順番に乞食すること、三種の衣のみ持って巡ることである。三種の衣は三種の袈裟である。大衣は九条・十一条・十三条・十五条・十七条・十九条・二十一条・二十三条・二十五条であり、中衣は七条であり、下衣は五条である。)

この割注の記述は『翻訳名義集』卷一 (釈氏衆名篇第十三) 「頭陀」の項とほぼ一致する。以下が翻訳名義集「頭陀」の項である。

頭陀。新云杜多。此云抖擻。亦云修治。亦云洮汰。垂裕記云。抖擻煩惱故也。善注意天子經云。頭陀者。抖擻貪欲嗔恚愚癡。三界内外六入。若不取不捨。不修不著。我說彼人。名爲杜多。今訛稱頭陀。大品云。須菩提說法者。受十二頭陀。一作阿蘭若。二常乞食。三納衣。四一坐食。五節量食。六中後不飲漿。七塚間住。八樹下。九露地住。十常坐不臥。十一次第乞食。十二但三衣。(下略) 〈T54n2131p1074b19-b27〉

翻訳名義集の「頭陀」の項ではまず「頭陀」, 「杜多」2つの相異なる音訳語が掲げられ、続いて「抖擻」, 「修治」, 「洮汰」といった大義が示されている。その次に、典拠を示しつつこの語の由来や解説、この語の使用例などが記述されており、十二頭陀に関する記述もこの中で示されている。

翻訳名義集の項を月印釈譜の割注と比べてみると、音訳語に関しては月印釈譜では本文に現れた「頭陀」のみが現れ、大義については翻訳名義集の「抖擻」が月印釈譜の「떠러 버리다 (払い捨てる)」に一致し、語の由来は翻訳名義集の「抖擻煩惱故」が月印釈譜の「煩惱를 떠러 버릴 씨라 (煩惱を払い捨てることである)」に一致している。十二頭陀行の各々の項目と

その順番については翻訳名義集と月印釈譜とで同一である⁴。翻訳名義集では十二頭陀行の項目列挙の後、さらに十二頭陀行についての解説が続くが、月印釈譜ではその部分が欠落している。代わりに、月印釈譜では「大衣・中衣・下衣」の語義説明をした注が添えられている。

このように月印釈譜の割注と翻訳名義集の記述は完全に一致しているわけではないが、「音訳語・大義・由来・十二頭陀行」という事がらの提示順が同一であり、その内容についても月印釈譜が翻訳名義集に一致している。このようなことから、月印釈譜の当該割注が翻訳名義集を底本としていると推測しうる。また、月印釈譜の割注は翻訳名義集の文を全訳したのではなく、情報を適宜取捨選択して翻訳していることが分かる。

(2) 「阿耨多羅三藐三菩提」への割注 (ws40b5-41a7)

この割注の全文は以下の通りである。途中の 41a5 に円圈があり、その前後2つの部分から構成されている。

阿訖 업다 혼 마리오 耨多羅訖 우히오 三은 正이오 藐은 等이오 菩提訖 覺이니 우 업슨 正히 等호 正覺이라 혼 마리니 眞實入 性을 니르니 眞實入 性이 귀 佛이시니 佛은 覺이라 혼 마리니 조려 니르면 覺이라 호고 子細히 니르면 無上正等正覺이라 眞實入 性에 더 우히 업슬씨 無上이오 諸佛이며 衆生이며 이 性이 正히 平等호씨 正等이오 覺이 두러비 불가 너비 다 비취실씨 正覺이라. ○ 至極호 果 因을 견내뵈실씨 無上이오 正은 中道를 正히 보실 씨오 等은 두 마술 혼 띄 비취실 씨니 果 우히 세 智라. (阿は無いといった語であり、耨多羅は上であり、三は正であり、藐は等であり、菩提は覺であるので、上のない正に等しい正覺という語であり、眞の性を言ったものである。眞の性とはそれが仏であられる。仏は覺という語であり、縮めて言えば覺といい、詳しく言えば無上正等正覺である。眞の性に更に上がないので無上であり、諸仏も衆生もこの性が正に平等なので正等であり、覺が丸く明るく広く尽くお照らしになるので正覺である。○ 至極の果が因をお超えになるので無上であり、正は中道を正にご覧になることであり、等は二つの際を同時にお照らしになることであるが、果の上の三つの智である)

박금자(1997:113)によれば、円圈は「テキストの話題が変わった場合」、「ある本から別の本へと底本が画然と変わった場合」、「底本は同じであっても底本の間を省略した場合」に用いられるとしている。従って、円圈以前の部分と以降の部分は、内容上の何らかの切れ目があることになる。

この割注の内容は、翻訳名義集卷五（法宝衆篇第五十）「阿耨多羅三藐三菩提」の項の内容と一部が対応している。以下が翻訳名義集の「阿耨多羅三藐三菩提」の項である。

阿耨多羅三藐三菩提。肇論曰。秦言無上正遍知道。莫之大無上也。其道眞正無法不知正遍知也。苑師云。阿此云無。耨多羅翻上。三藐翻正也。三遍也等也。菩提覺也。孤山疏

⁴ 十二頭陀の項目とその提示順は文献間で必ずしも一致していない。例えば、『法門名義集』(T54n2124p197b29-c04)では「一者盡形乞食。二者阿蘭若處住。三者著糞掃衣。四一坐食。五者常坐。六者中後不受非時食。七者中後不飲漿。八者但有三衣。九者蠶衣。十者樹下坐。十一者空地住。十二者死屍間住」となっている。

云。極果超因故云無上。正則正觀中道。等則雙照二邊。蓋果上三智也。(下略)〈T54n2131p1130a7-a12〉

月印釈譜割注の円圈以降の部分は翻訳名義集の「極果超因故云無上。正則正觀中道。等則雙照二邊。蓋果上三智也。」〈p1130a11-a12〉に一致している。しかし、円圈以前の部分は月印釈譜割注と翻訳名義集とが必ずしも一致しておらず、翻訳名義集が底本であると即断するのは困難である。まず、月印釈譜割注では「阿耨多羅三藐三菩提」の語を「阿/耨多羅/三/藐/菩提」のように分解し、「菩提」の直前の「三」を省いて釈義しているのに対し、翻訳名義集では「阿/耨多羅/三藐/三/菩提」のように区切り、「菩提」の直前の「三」を省いていない。さらに、翻訳名義集では「三藐」を「正」とし、月印釈譜割注の「三」を「正」とするのと微妙に異なっている。次に、月印釈譜割注に見える「우 업슨 正히 等호 正覺이라 혼 마리니 眞實入 性を 니르니 眞實入 性이 그 佛이시니 佛은 覺이라 혼 마리니 조려 니르면 覺이라 호고 子細히 니르면 無上正等正覺이라 眞實入 性에 더 우히 업슬씩 無上이오 諸佛이며 衆生이며 이 性이 正히 平等호씩 正等이오 覺이 두려비 불가 너비 다 비취실씩 正覺이라 (上のない正に等しい正覺という語であり、眞の性を言ったものである。眞の性とはそれが仏であられる。仏は覺という語であり、縮めて言えば覺といい、詳しく言えば無上正等正覺である。眞の性に更に上がらないので無上であり、諸仏も衆生もこの性が正に平等なので正等であり、覺が丸く明るく広く尽くお照らしになるので正覺である。)」の部分は翻訳名義集に見えない。月印釈譜割注と翻訳名義集のこのような食い違いから、円圈以前の部分は別の底本がある可能性が高いが、今回の調査では特定しえなかった⁵。

(3)「三十七品助菩提法」への割注 (ws43a2-46a5)

この割注は三十七品助菩提法を構成する四念処、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道について解説を加えたものである。今回の調査では、この注の底本を十分に特定しえなかったが、いくつかの文献に類似した文言が見つかった。

まず、三十七品助菩提法の各項目と提示順について見ると、月印釈譜割注は「四念処、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道」の順に項目が挙げられている。これは『天台四教儀』に見える「三十七道品」の項目の提示順に一致する。

廣則三十七道品。此三十七合爲七科。一四念處。一觀身不淨〔色蘊〕⁶二觀受是苦〔受蘊〕三觀心無常〔識蘊〕四觀法無我〔想行蘊〕二四正勤。一未生惡令不生。二已生惡令滅。三未生善令生。四已生善令增長。三四如意足〔欲念進慧〕四五根〔信進念定慧〕五五力〔同上根名〕六七覺支〔念擇進喜輕安定捨〕七八正道〔正見正思惟正語正業正精進正定正念正命〕〈T46n1931p776c11-c18〉

次に、個々の項目解説の記述を見ていくことにする。個々の項目の解説は「四念処、四正勤、四如意足、五根五力、八正道」の順になされており、「七覺支」の記述を欠く。以下、四念処

⁵ 「阿耨多羅三藐三菩提」の語釈に関しては、『一切經音義』中の「阿耨多羅三藐三菩提」項に見える「阿此云無也耨多羅此云上也三云正也藐等也又三正也菩提覺也總云無上正等正覺也」〈T54n2128p477c4-c5〉の記述のほうが近い。

⁶ [] は原文が割注となっていることを表す。

から順に見ていく。

四念處는 네 가짓 念호는 고디니 모미 조티 몸 호를 보며 受호는 이리 다 受苦르빔
요를 보며 ㅁㅁㅁ 無常호를 보며 法에 나 업수를 볼 씨라. 즐거븐 受도 잇건마른
즐거부미 업을 저기 설볼씨 다 受苦르빔니라. 도호 法과 구즌 法과를 내 行호노라
호건마른 내라 혼 거시 實엔 거출씨 내 업스니라. (四念處は四種の念じる所であるが、
身が清くないのを見、受ける事がみな苦しいのを見、心が無常であるのを見、法に我が
ないのを見ることである。楽しい受もあるけれども楽しみがないときに寂しいので、尽
く苦しいのである。よい法と悪しき法とを我は行わんというが、我というものは実は劣
っているの、我がないのである。)〈ws43a4-b2〉

「法에 나 업수를 볼 씨라」までの前半部分 (ws43a5-a6) は上述『天台四教儀』の「一觀
身不淨二觀受是苦三觀心無常四觀法無我」〈T46n1931p776c12-c14〉の文言に一致する。しかし
ながら、「즐거븐 受도 잇건마른」以下の後半部分 (ws43a6-43b2) は『天台四教儀』に見えな
い。

次に、四正勤に関する部分を見る。月印釈譜割注の記述は『翻訳名義集』巻四(衆善行法篇
第四十八)「毘毘必柯摩羅阿佚多」の項目⁷の記述とほぼ一致する。

四正勤은 네 가짓 正호 道理에 브즈러니 行호 씨니 호나호 호마 넷는 구즌 法을
그저 브료리라 호야 一心으로 精勤호 씨니 四念處 불 저기 게으른 ㅁㅁㅁ로 다숫
가짓 돕는 煩惱ㅣ ㅁㅁㅁ를 두퍼 다숫 가짓 도호 根을 여회여 이런 구즌 法이 넷거든
그추리라 호야 精進호 씨니 아래 호 가지라. 다숫 가짓 두푸몬 貪欲과 嗔心과 昏昧
호야 ㅈ오름과 뭇여 어저름과 疑心과라. 다숫 가짓 도호 根은 아래 닐은 五根이라.
둘호 아니 넷는 구즌 法을 나디 아니케 호리라 호야 精進호미오 세호 아니 넷는 도
호 法을 내요리라 호야 精進호미오 네호 호마 넷는 도호 法을 길우리라 호야 精進
호미라. (四正勤は四種の正しい道理をまじめに行なうことである。一つめは、すでに生
じている悪しき法を断ち切らんとして一心に精勤することである。四念處を見るとときに
怠けた心で五種の覆う煩惱が心を覆い、五種のよい根を離れてこのような悪しき法が生
じていれば断たんと言って精進することである。以下同様である。五種の覆いは、貪欲・
嗔心・昏昧・居眠り・動き乱れること・疑心である。五種のよい根は以下に言う五根で
ある。二つめは、生じていない悪しき法を生じさせないようにしようと言って精進する
ことであり、三つめは、生じていないよい法を生まんと言って精進することであり、四
つめは、すでに生じているよい法を育てんと言って精進することである。)〈ws43b2-44a3〉

毘毘必柯摩羅阿佚多。此云正勤。斯有四法。法界次第云。一已生惡法爲除斷。一心精勤
四念處觀時。若懈怠心起。五蓋等諸煩惱覆心。離信等五種善根。時如是等惡若已生爲斷
故。一心勤精進。方便除斷令盡也。二未生惡法不令生。一心勤精進四念處觀時。(中略)
三未生善法爲生。(中略) 四已生善法爲增長。〈T54 n2131p1120b4-b15〉

四如意足に関する月印釈譜割注の記述は、以下のとおり『翻訳名義集』巻四(衆善行法篇第
四十八)「摩奴是若」の項目の記述とほぼ一致する。

⁷ 翻訳名義集の方は梵語の音訳語が見出し語となっている。

四如意足은 네 가짓 뜯 곧흔 神足이니 흥나흔 欲如意足이니 欲이 主人이 득외야 定을 득하야 긋는 횡더기 이려 如意足を 닷글 씨오 들흔 精進如意足이니 精進이 主人이 득외야 定을 득하야 긋는 횡더기 일 씨오 세흔 心如意足이니 므스미 主人이 득월 씨오 네흔 思惟如意足이니 스랑호미 主人이 득월 씨라. 四念處엿 實흔 智慧와 四正勤엿 正흔 精進 이 두 가지는 하고 定力이 적더니 이제 네 가짓 定을 득하야 智와 定과 곧하야 願하논 이룰 다 득홀씨 四如意足이라 하니라. 智와 定과 곧하면 結使를 그칠씨 긋는 횡더기 이다 하니라. (四如意足は四種の意のごとき神足である。一つめは欲如意足で、欲が主人となり定を得て断つ行ないが成り、如意足を磨くことであり、二つめは精進如意足で、精進が主人となり定を得て断つ行ないが成ることであり、三つめは心如意足で、心が主人となることであり、四つめは思惟如意足で、思いが主人となることである。四念処の実なる智慧と四正勤の正しい精進、この二種は多く定力が少なかったが、今や四種の定を得て、智と定とが等しければ結使を断つので、断つ行ないが成ると言ったのである。)〈ws44a3-44b6〉

摩奴是若。此云如意。法界次第明四如意足。一欲如意足。欲爲主。得定斷行成就修如意足分。是爲欲如意足。二精進如意足。精進爲主。得定斷行成就修如意分。是爲精進足。三心如意。心爲主。(中略)四思惟如意足。思惟爲主通言如意者。四念處中。實智慧。四正勤中。正精進。精進智慧增多。定力小弱。得四種定攝心。故智定力等。所願皆得。故名如意足。智定若等。能斷結使。故云斷行成就也〈T54n2131p1120b20-b29〉

五根五力に関する月印釈譜割注の記述は、『翻譯名義集』卷四(衆善行法篇第四十八)「婆羅」の項目の記述とほぼ一致する。

五根 五力은 信과 精進과 念과 定과 慧와니 도흔 法을 잘 내요든 根이오 구즌 法을 잘 하로든 力이라. 信根이 力을 득하면 一定히 디녀 疑心 아니 흥고 精進力은 비록 法을 못 보아도 흥 므스므로 道理를 求하야 목숨 앓기디 아니 흥야 머쁘디 아니 홀 씨오 念力은 상네 스승의 마르초를 싱각하야 도흔 法이 오나든 드리고 구즌 法이 오나든 드리디 아니 호미 門 자븐 사름 곧흔 씨오 定力은 므스물 흥 고대 자바 뛰우디 아니 흥야 智慧를 도볼 씨오 智慧力은 諸法 實相을 實다비 잘 볼 씨라. (五根五力は信と精進と念と定と慧とである。よい法をよく出すのは根であり、悪しき法をよく破るのは力である。信根が力を得れば決まって受持して疑わず、精進力はたとえ法を見ることができなくても、一心に道を求めて命を惜しまず、留まらないことであり、念力は常に師匠の教えを思い、よい法が来たれば入れ、悪しき法が来たれば入れないことが門番のごときであり、定力は心を一所に置いて動かさず、智慧を助けることであり、智慧力は諸法実相を実のとおりによく見ることであり。)〈ws44 b6-45a7〉

五力。佛果十力。因人五力者。一信力。二精進力。三念力。四定力。五慧力(割注略) 信根得力則能決定受持不疑。精進力故。雖未見法。一心求道。不惜身命不休不息。念力故常憶師教。善法來聽入。惡法來不聽入。如守門人。定力故攝心。一處不動。以助智慧。智慧力故。能如實觀諸法實相。〈T54n2131p1120c6- c12〉

八正道に関する部分は底本の特定ができなかった。しかしながら、八正道に対する注は単に語義を記したものと見ることができ、特定の底本がない可能性もある。

最後に「結使」に対する注が記されている (ws45b2-46a5)⁸。このうち「使」に関する部分と内容的に一致する文章が『法苑珠林』卷第七十二 (十使篇第八十三, 会名部第二) に見える。

使는 브릴 씨니 凡夫 1 갓근 惑心으로 妄量엿 헤물 그치들 몬 ㅎ야 三界에 나디 몬 호미 그윳 使者 1 罪人 조차 들니는 듯 흘씩 使 1 라 ㅎ니 使 1 열 가지니 ㅎ나흔 身見이니 身見은 모를 볼 씨니 내라 ㄴ미라 ㅎ야 볼 씨라. 둘흔 邊見이니 邊見은 ㅎ넉 ㅁ술 볼 씨니 모미 時常 잇느니라 홈과 本來 업슨 거시라 홈래라. 세흔 邪見이니 因果 1 업다 ㅎ야 邪曲히 볼 씨라. 네흔 戒取 1 니 警戒를 가질 씨니 ㅎ갓 警戒 디뉴ㅁ로 道理 사마 가질 씨라. 다섯흔 見取 1 니 사오나쁜 法을 자바 ㅁ 노ㅅ니라 ㅎ야 제 보를 울호라 ㅎ야 가질 씨라. 여스흔 貪이오 닐구븐 瞋이오 여들븐 癡오 아호븐 慢이니 ㄴ 업시 울 씨라. 열흔 疑니 疑心이라. (使は遣わせることである。凡夫が逆さまの惑心をもって妄な想いを止められず、三界に生まれえないことが、公の使者が罪人を追い回すかのようなので使と言った。使には十種がある。一つめは身見である。身見は身を見ることであるが、我である他人であるといい見ることである。二つめは辺見である。辺見は一方の際を見ることであるが、身が常にあるのであるということ、本来無いものだという事とである。三つめは邪見である。因果がないといい邪惡に見ることである。四つめは戒取である。警戒を持つことであるが、一種の警戒を帯びることを道と見なし持つことである。五つめは見取である。劣った法を取って最高だといい、自分の見を正しいといって持つことである。六つめは貪であり、七つめは瞋であり、八つめは痴であり、九つめは慢であるが、他人をないがしろにすることである。十個めは疑であるが、疑いである。)〈ws45b3-46a5〉

初釋名者。一身見。二邊見。三邪見。四戒取。五見取。六貪。七瞋。八癡。九慢。十疑。此之十使生死根本。凡夫倒惑未曾觀理。妄執相續不出三有。如世公使隨逐罪人。名之爲使。〈T53n2122p834a22-a25〉

「身見, 辺見, 邪見, 戒取, 見取」の五語については語義の説明があるが、これは『翻訳名義集』卷六 (煩惱惑業篇第五十六) 「達梨舍那」中に現れる各語の説明に類似するが文言は必ずしも一致してはいない⁹。あるいは底本が別に存在するのかもしれない。

(4) 「薄伽梵」への割注 (49b2-50a4)

薄伽梵은 德이 하샤 至極 노ㅅ신 일후미시니 여섯 가짓 ㅼ디 잇느니 ㅎ나흔 自在 ㅎ샤미오 둘흔 ㅁ 나 盛ㅎ샤미오 세흔 端正코 식식ㅎ샤미오 네흔 일홈 ㅅ이샤미오 다섯흔 吉祥ㅎ샤미오 여스흔 尊貴ㅎ샤미라. 如來 ㄴ외야 煩惱애 ㅁ이디 아니 ㅎ실씩 自在 ㅎ시고 ㅁㅼ로 智慧入 ㅁ로 불이실씩 ㅁ 나 盛ㅎ샤미오 三十二相 八十種好로 꾸며

⁸ これは ws44b5 に現れる「結使」に対する注である。

⁹ 翻訳名義集では、「身見」は「執我我所爲身見」(p1149b12-b13), 「辺見」は「邊見隨身計斷常」(p1149b13), 「邪見」は「邪見撥無因果法」(p1149b14), 「戒取」は「戒取於非因計因」(p1149b14), 「見取」は「見取執劣以爲勝」(p1149b13) と説明されている。

겨실씩 端正코 식씩샤미오 功德이 마즈샤 모락스 불리 업슬씩 일흠 솟이샤미오 一切 世間이 갖가비 드리 供養하스바 다 讚嘆하스 불씩 吉祥하샤미오 一切 德이 마즈샤 상네 方便으로 一切 衆生을 리히며 즐겁게 하실씩 尊貴하샤미라. (薄伽梵は徳が多くあられ、極めて高い名であられる。六種の意があるが、一つは自在であられることであり、二つめは輝き盛んであられることであり、三つめは端正でりりしくあられることであり、四つめは名がとどろいておられることであり、五つめは吉祥であられることであり、六つめは尊貴であられることである。如来は二度と煩惱にしばられないので自在であられ、激しい智慧の火をもってお鍛えになるので、輝き盛んであられることであり、三十二相・八十種好をもって飾っておられるので、端正でりりしくておられることであり、功德が具わっておられ、存じ上げない者がいないので名がとどろいておられることであり、一切の世間が近しく入り、供養いたして尽く賛嘆いたすので、吉祥であられることであり、一切の徳が具わっておられ、常に方便をもって一切の衆生に利し、楽しくなさるので、尊貴であられることである。) 〈ws49b2-50a4〉

この割注の文言は『翻訳名義集』巻一（十種通号第一）「婆伽婆」の項の記述にほぼ一致する。

婆伽婆。應法師云。薄伽梵總衆徳。至尚之名也。大論云。一名有徳。二名巧分別諸法。三名有名聲。無有得名聲如佛者。四能破姪怒癡。新云薄伽梵。名具六義。佛地論曰。薄伽梵聲。依六義轉。一自在。二熾盛。三端嚴。四名稱。五吉祥。六尊貴。(中略)謂如來永不繫屬諸煩惱。故具自在義。猛焰智火所燒煉故。具熾盛義。妙三十二大士相等所莊飾故。具端嚴義。一切殊勝功德圓滿無不知故具名稱義。一切世間親近供養咸稱讚故。具吉祥義。具一切徳。常起方便。利益安樂一切有情。無懈廢故。具尊貴義。〈T54n2131p1057b23-c07〉

(5) 「無生忍」への割注 (ws53b2-54b1)

この割注は中間に円圈があり、円圈の前は「無生忍」の解説、円圈の後には黒氏梵志が無生忍を悟る説話となっている。

無生忍은 나미 업서 츠물 씨니 츠모미 두 가지니 生忍과 法忍페라. 生忍이 또 두 가지니 하나흔 恭敬 供養커든 憍慢흔 므슴 아니 내요미오 둘흔 구지즈며 티거든 怒하븐 므슴 아니 내요미라. 法忍이 또 두 가지니 하나흔 치뵐과 더뵐과 브름과 비와빅 골뵐과 목 들름과 老病死 들히오 둘흔 怒흔과 시름과 疑心과 姪欲과 憍慢과 邪曲하븐 봄들히니 이 두 法에 츠마 뫼디 아니 호미 法忍이라. ○ 黑氏 梵志 神力으로 두 소내 合歡梧桐花 자바〔梧桐은 머귀니 合歡樹 梧桐 곧히니라.〕부텨기 供養하습더니 부테 노하 브리라 하신대 윈 소넷 고줄 노하늘 부테 또 노하 브리라 하신대 올흔 소넷 고줄 노하늘 부테 또 노하 브리라 하신대 梵志 슬보디 “世尊하. 두 소니 다 뫼어늘 므스글 노하라 하시느니잇고?” 부테 니르샤디 “고줄 노하라 혼는 디 아니라 밧 六塵과 안 六根과 가운딧 六識을 노하 브리라. 一時에 브려 브롬 것 업슨 자히이 네 生死 免毫 고디라.” 梵志 즉재 無生忍을 아니라. (無生忍は生じることがなく堪えることである。堪えることには二つがあり、生忍と法忍である。生忍にまた二種類あ

り、一つめは敬い供養すれば驕る心を生まないことであり、二つめは罵り殴れば腹立たしい心を生まないことである。法忍にまた二種類あり、一つめは寒さと暑さと風と雨と空腹とのどの渴きと老病死などであり、二つめは怒りと心配と疑いと淫欲と傲慢と邪惡な見などである。この二つの法に堪えて動かないことが法忍である。○ 黒氏梵志が神力をもって両手に合歡梧桐花を取り、〔梧桐は桐である。合歡樹木は桐のようなものである。〕仏に供養いたしたところ、仏が放り捨てよとおっしゃったので左手の花を捨てたら、仏がまた放り捨てよとおっしゃったので右手の花を捨てたら、仏がまた放り捨てよとおっしゃったので、梵志が申し上げるには「世尊よ。両手がともに空になったのに、何を捨てよとおっしゃるのですか。」仏がおっしゃるには「花を捨てよというのではなく、外の六塵と内の六根と、中間の六識を放り捨てよ。一時に捨てて、捨てるものがない所が、汝の生死を免れるところである。」梵志は直ちに無生忍を悟ったのである。）〈ws53b2-54b1〉

この割注の前半部は『翻譯名義集』卷四（辨六度法篇第四十四）「羼提」の項の記述に一致する。

忍辱有二種。一者生忍二者法忍。云何名生忍。生忍有二種。一於恭敬供養中。能忍不著。則不生憍逸。二於瞋罵打害中。能忍則不生瞋恨怨惱。是爲生忍。云何名法忍。法忍有二種。一者非心法。謂寒熱風雨。飢渴老病死等。二者心法。謂瞋恚憂愁疑妬憍慢諸邪見等。菩薩於此二法。能忍不動是名法忍 〈T54n2131 p1116a1-a8〉

後半部の黒氏梵志の説話は『五灯会元』（X80n1565）に見え、文言も月印釈譜割注とほぼ一致する。

世尊因黒氏梵志。運神力。以左右手擎合歡。梧桐花兩株。來供養佛。佛召仙人。梵志應諾。佛曰。放下著。梵志遂放下左手一株花。佛又召仙人。放下著。梵志又放下右手一株花。佛又召仙人。放下著。梵志曰。世尊。我今兩手皆空。更教放下箇甚麼。佛曰。吾非教汝放捨其花。汝當放捨外六塵。內六根。中六識。一時捨却。無可捨處。是汝免生死處。梵志於言下。悟無生忍。〈X80n1565p30b8-b15〉

(6) 「모매 千燈 허신 자 (身に千燈を灯した地)」への割注 (ws54b6-54f1)

네 閻浮提王 일후미 度闍尼婆梨러시니 八萬四千 므솔홀 가져 거시더니 一切를 慈悲호샤 빠리 가스며러 各各 安樂호디 므스매 날비 너기샤 “妙法을 호야 利益게 호리라.” 호샤 出令호샤디 “뉘 妙法으로 내게 니르려뇨? 제 가지고져 홀 양으로 주리라.” 호 婆羅門이 닐오디 “내 法을 뒛노이다.” 王이 마자 禮數호시고 니르샤디 “願호 둔 大師 法을 불겨 들이쇼셔.” 婆羅門이 술보디 “모매 千燈을 翫 供養호샤 사 술보리이다.” 王이 閻浮提 內에 出令호샤디 “이 後 日월에 모매 千燈 翫리라.” 百姓들히 시름호야 王의 와 술보디 “王곳 업스시면 누를 믿즈브리잇고? 엇데 호 婆羅門 爲호샤 一切를 브리시느니잇고?” 王이 니르샤디 “너희 값간도 내 無上 道心を 물리완디 말라. 내 이 일 호야 盟誓호야 부터 ㄸ외요를 호호노니 後에 成佛호 저기 반ㄸ기 너희를 몬져 濟度호리라.” 한 사르미 짜해 디여 우더니 모뎡 외파 시메 기름

무터 버리시고 니르샤되 “어엿비 너겨 說法호신 後에사 불 혀리이다. 나옥 ㅎ다가 목수미 그즈면 묻 미쳐 들즈불리이다.” 婆羅門이 슬보되 “상벳 거시 다 업스며 노픈 것도 떠러 디며 모든 거시 여희며 산 거시 죽느니라.” 王이 마장 깃그샤 “燈 혀라.” 호시니 求호시논 法은 佛道 일우를 爲호샤 慧明으로 한 사르물 비취여 알외요리라. 이 盟誓 發호실 저기 天地 마장 뒤여 우호로 淨居에 니르리 쏘 다 드러 치더니 이 大士 목숨 도라 보디 아니 호샤물 보고 모다 다 누려 와 虛空에 마독호야 이셔 우니 늦 프리 한비 곧더니 天帝 닐오되 “설부미 이리호니 아니 뉘웃브녀?” 對答호샤되 “뉘웃브디 아니 호이다.” 호시고 盟誓호야 니르샤되 “나옥 처엄 乃終에 뉘웃븐 막숨 업손 던덴 願호 둔 다 平復호고라.” 호시니 즉제 平復호니 그췌 王은 부텃 모미시니라. (昔、閻浮提王は名を虔闍尼婆梨とおっしゃり、八万四千の村を持っておられたが、一切を慈悲なさり、米が豊かでそれぞれ安樂だったが、心に不満を覚え「妙法を求めて利益あらしめん。」とおっしゃり、命令するに「誰か妙法をもって私に説く者はいないか。自分のほしいものを与えよう。」ある婆羅門が言うには、「私が法を持っています。」王が迎えて礼をなさっておっしゃるには、「願わくば大師が法を明らかにし聞かせてください。」婆羅門が申し上げるには「体に千灯をともし供養なさればお説きいたします。」王が閻浮提内に命令するに「この後七日、体に千灯をともしさん。」民衆らが心配して王のところに来て申し上げるには「王がいらっしゃらなければ誰を信じ申し上げましょう。なぜ一人の婆羅門のために一切をお捨てになるのですか。」王がおっしゃるには「汝らは一時も私の無常道心を退けるな。私はこのことをして、誓って仏になるのを求めているので、後に成仏したときに必ず汝らをまず済度しよう。」多くの人が地に臥して泣いていたが、体をえぐり芯に油を塗りお並べになっておっしゃるには「憐れに思い説法なさった後に、火をつけます。私がもし絶命したら聞くことができません。」婆羅門が申し上げるには「常なるものは尽くなくなり、高いものも落ち、集まったものは離れ、生きているものは死ぬのです。」王がとてもお喜びになり「灯をともしせ。」とおっしゃった。お求めになっている法は仏道を成すためであられ、慧明をもって大衆を照らし悟らせであろう。この誓いをお発しになるときに、天地が大いに動き、上は淨居に至るまでまた尽く揺れていたが、この大士が命を顧みないのを見て、みな降りて来て虚空いっぱいにて泣くので、涙が大雨のようであった。天帝が言うには「悲しみがかくのごときなのに悔やまないのか。」お答えになるには「悔やみません。」とおっしゃり、誓っておっしゃるには「私が終始悔やむ心がないのであれば、願わくばみな平復してくれ。」とおっしゃるので直ちに平復したが、そのときの王は仏の身であられたのである。)

〈ws54b6-54f1〉

この説話は『経律異相』巻第二十五(虔闍尼婆梨王為聞一偈剗身以然千灯一)に見える説話である。『経律異相』では婆羅門が「勞度差」という固有名詞で出てきたり、月印釈譜割注で一部の語句が省略される(以下にカッコで括られた部分)などの違いはあるものの、基本的に月印釈譜割注と『経律異相』の文章は対応している。

昔有閻浮提王。名虔闍尼婆梨。典領八萬四千聚落。慈悲一切穀米豐賤。各得安樂而未盡我心。當求妙法以相利益。宣令一切誰有妙法。爲我說者隨所欲得。有婆羅門。名勞度差。云我有法。王迎而禮之白言。願大師闡法令聞。勞度差曰。大王。今日能於身上。剗然千燈用供養者。乃相爲説。王宣命閻浮提內。却後七日剗身然燈。人民懷愁來詣王所。(有命

依王如嬰兒依母。)王若崩背何所親怙。云何爲此一婆羅門棄於一切。汝等慎勿却我無上道心。吾爲是事誓求作佛。後成佛時必先度汝。衆人啼哭投地懊惱。即便剗身布諸脂炷。白大師言。哀矜說法。然後然燈。我脫命斷不及聞之。勞度差言 常者皆盡 高者亦墮 合會有離 生者有死王歡喜無量。便命然燈。所求之法爲成佛道。當以慧明照悟衆人。發此誓時天地大動。上至淨居皆亦震搖。見此大士不顧軀命。僉然俱下側塞虛空。啼哭流淚猶如盛雨。天帝言曰。痛惱如此心不悔耶。答曰不悔。因立誓言。若我始終心不悔者。願皆平復應念平復。時王者即佛身是〈T53n2121p136b27-c19〉

(7)「阿鞞跋致」への割注 (ws69b3-70a5)

阿鞞跋致는 물리 그우디 아니타 혼 마리니 모르디 아니 호미 세 뜨디 잇느니 空位에 드러 모르디 아니 흠과 假行에 드러 모르디 아니 흠과 中念에 드러 모르디 아니 흠패라. 혼 念도 相 업수미 空이니 그 般若ㅣ니 두 生死를 여혈씩니라. 몸 마즌 法 업수미 假ㅣ니 假는 빌 씨니 本來 업슨 거기 法 이슈미 비름 곤ㅎ니라. 그 解脫이니 항더기 마줄씩니라. 혼나토 아니며 다르도 아니 호미 中이니 그 法身이니 眞實入 境界를 証호씩니라. 두 生死는 分段生死와 變易生死ㅣ니 分은 제여굼 가니니 목수미 그지라. 段은 그티니 모미 열구리라. 變易은 고타 득윳 씨니 因이 올ㅁㅁ 果ㅣ 맛골 씨라. (“阿鞞跋致”は退き転かないといった語である。退かないことには三つの意味があり、空位に入り退かないことと、仮行に入り退かないことと、中念に入り退かないこととである。一つの念も相なきことが空であり、それが般若であるが、二つの生死を離れるからである。具わっていない法のないことが仮である。“仮”は借りることである。本来ないところに法のあることは借りるがごときである。それが解脱であるが、行いが具わっているからである。一つでもなく、異なってもいないことが中である。それが法身であるが、まことの境界を悟るからである。二つの生死は分段生死と変易生死である。“分”はそれぞれの分かれであるが、命の果てである。“段”は端であるが、身の姿である。“変易”は変えてなることであるが、因が移り果が変わることである。)〈ws69b3-70a5〉

この割注は『翻訳名義集』巻五(法宝衆名篇第五十)「阿鞞跋致」の項目中の記述にほぼ対応している。

阿鞞跋致。亦名阿惟越致。此云不退轉。不退有三義。入空位不退。入假行不退。入中念不退。妙樂云。般若是位。離二死故。解脫是行。諸行具故。法身是念。證實境故。〈T54n2131p1131a19-a22〉

月印釈譜割注では「몸 마즌 法 업수미 假ㅣ니 假는 빌 씨니 本來 업슨 거기 法 이슈미 비름 곤ㅎ니라. (具わっていない法のないことが仮である。“仮”は借りることである。本来ないところに法のあることは借りるがごときである。)」のように、途中途中で字義・語義の解説が入っている。

4. 底本の書誌について

以上のように月印釈譜卷七の長型割注の底本と見られる『翻訳名義集』、『五灯会元』、『経律異相』について簡略に触れることにする。

『翻訳名義集』は宋の姑蘇山景德寺の普潤大師・法雲（1088-1158）が1143（紹興13）年に編纂した梵語辞典で、巻数は7巻あるいは20巻である。梵語の翻訳は玄奘以前の旧訳とそれ以降の新訳とに大別され、音訳語を中心として顕著な違いが見られる。翻訳名義集はそれに先行する梵語語彙集を受け、梵語を意義別に64編に分類し、それぞれの編において個々の梵語の翻訳語を整理しつつ語義を解説したものである。前近代に編まれた梵語辞典としては非常に重要な文献であり、「とまれ古來佛家の翻譯を口にするもの、先づその依憑を本書に索むるは總ての一致するところである」（小野玄妙・丸山孝雄, 1933-1935:214）という。このような事情から、この書が朝鮮仏教においても重要な意義を持っていたであろうことは想像に難くない。

『翻訳名義集』は古来からのさまざまな文献に現れる梵語について、出典を明示しつつ記述している。従って、月印釈譜割注の文言が『翻訳名義集』に一致するとはいえ、厳密に言えばその典拠は更に古くにさかのぼりうるであろう。しかしながら、このたび複数の割注において『翻訳名義集』のテキストと一致する文言が発見されたことは、これが単なる偶然ではなく、月印釈譜の編纂者が注を附する際に『翻訳名義集』を参照した可能性が高いと見ることができる。

『五灯会元』は南宋の大川普濟撰（一説に雪簾慧明撰）の書で、1253（宝祐元）年に刊の全20巻である。本書は禅門仏祖列伝を集大成したものであり、過去七仏より西天二十七祖、東土六祖、青原下十六世、南岳十七世までの列伝である。

「五灯」とは、当時すでに存在していた五つの禅宗の史書、すなわち『景德伝灯録』、『天聖広灯録』、『建中靖国統灯録』、『聯灯会要』、『嘉泰普灯録』を指す。それらの内容を刪補し集大成したものが『五灯会元』であるという。ただし、黒氏梵志の説話はそれら五種の書に見えない。

『経律異相』は経律などに散見する異相を集めたものである。梁の武帝（464-549）の勅命により僧旻（467-527）が成した類書になお遺漏があったため、武帝の勅命を受けた宝唱が法生らの助力により増補したものである。516（天監15）年に成立。天部から地獄部に至る39部から構成され、各部ごとに広く仏典から蒐集した譬喩、因縁談などを一々典拠を明らかにしつつ収録している。

5. おわりに

以上のように月印釈譜卷七の割注の文言がいくつかの經典の文言に一致することが明らかになったが、釈譜詳細の編纂者が本文と割注それぞれ別個の經典を底本として編纂したとは考えにくい。例えば、釈譜詳細のうち法華経を底本とする部分は、割注も含めて法華経諺解と文言がよく一致している。すなわち、釈譜詳細の編纂者はすでに疏の附いた經典を底本として釈譜詳細を編纂したと推測しうる。そのように考えたとき、2.において見たように金守温の『増修釈迦譜』に言及した千恵鳳(1977)の論はそれなりの説得力があろう。しかしながら、『増修釈迦譜』がいまだ発見されていない現在、真相の究明は後考を俟ちたい。

参考文献

- 강순애. 2001. 「『月印釋譜』의 저본에 관한 연구」. 『書誌學研究』 22: 63-96.
 金英培. 1996. 『注解 釋譜詳細〔第23・24〕』（重版）. 서울: 一潮閣.
 金英培. 2000. 『國語史資料研究－佛典諺解 중심－』. 서울: 月印.
 関泳珪. 1957. 「月印釋譜 第七・第八 開題」. 『月印釋譜 第七・第八』 國故叢刊 5: 1-11.

- 박금자. 1997. 『15세기 언해서의 협주 연구』. 서울: 집문당.
- 沈載完・李鉉奎. 1991. 『月印釋譜—無量幅板第廿一研究—』. 大邱: 慕山學術研究所.
- 安秉禧. 1992. 『國語史 資料 研究』. 서울: 문학과지성사.
- 李丙疇. 1996. 「釋譜詳節 第廿三・廿四 解題」. 『注解 釋譜詳節〔第23・24〕』: 277-316.
- 李浩權. 2001. 『석보상절의 서지와 언어』. 서울: 태학사.
- 千惠鳳. 1977. 「새로 發見된 初槧本 「月印釋譜」 卷七・八」. 『南溪曹佐鎬博士華甲紀念論叢 現代史學의 諸問題』: 477-493.
- 小野玄妙・丸山孝雄. 1933-1935. 『佛書解説大辭典』. 東京: 大東出版社.
- 高楠順次郎・渡邊海旭. 1927. 『大正新脩大藏經』. 東京: 大正一切經刊行會.
- 河村孝照(編集主任). 1975-1989. 『新纂大日本續藏經』. 東京: 国書刊行會.
- 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士. 2002. 『岩波 仏教辞典』第2版. 東京: 岩波書店

[表紙]

東京大学文学部小倉文庫所蔵 朝鮮語文献

- ・般若波羅密多心經略疏顯正記 [諺解]
- ・佛頂心陀羅尼經
- ・妙法蓮華經 [諺解]
- ・蒙山和尚法語略録 [諺解]
- ・禪家龜鑑 [諺解]

朝鮮語史研究 *Korean Historical Linguistics*

2009 (平成21) 年10月9日発行

編 者 いとうち ゆき 伊藤智ゆき

発 行 東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所



東京都府中市朝日町3-11-1

印 刷 日本ルート印刷出版株式会社
東京都江東区新大橋1-5-4永谷ビル1F

ISBN 978-4-86337-037-1

© C.Ito 2009